

石神遺跡SE800 出土土器の再検討

石神遺跡では、斉明朝と目されるその最も整備された段階（A-3期）には正殿にあたる庇付の東西棟建物を長大な建物で囲んだ南北に長い長方形区画が2つ並んでいる。表題の井戸SE800は東の区画の南辺中央にあってA期の初めから存在し、B期には廃絶しており、A期の建物等と命運をともにする遺構であり、その出土土器は遺跡の始まりと変遷、性格の究明にとって重要である。

井戸SE800出土の土器については、『藤原概報 15』上で飛鳥Ⅲに位置づけられるものがあることを報告しているが、提示した土器にはより古い段階の土器が含まれ、すべてが飛鳥Ⅲの標識になるわけでないことは自明のことであった。しかし、主に年代の指標となっている杯類が少ないにも関わらず、一部で飛鳥Ⅲの基準資料にあげたこともあって、無用な混乱を生じる恐れがあった。また、飛鳥藤原宮跡発掘調査部では、近年新たに追加された川原寺下層、豊浦寺下層、山田寺下層、飛鳥池遺跡、甘樫丘東麓など、おもに飛鳥Ⅰ～Ⅱの土器群について当該年度の『藤原概報』誌上に概要を報告するとともに、「飛鳥地域土器編年基準資料」の公刊にむけて飛鳥Ⅰ～Ⅴ全体の再検討を進めつつあるが、その一環として飛鳥Ⅲまでの土器が含まれる井戸の「一括遺物」の検討は必要な作業でもある。

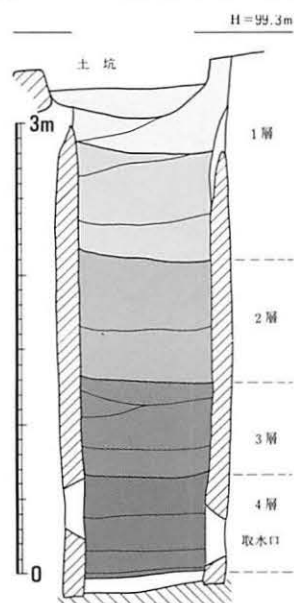
遺構と層序 井戸は杉の巨木を半裁して厚さ18cmにくり抜き杏仁形に合わせた井戸枠をもち、周囲には玉石を方形に敷き詰め、その外側には、北を除く三方に側石を立てて、東西5.3m、南北6.7m、深さ約1mの方形石組池状をなす。井戸枠は東西内法1.2～1.37m、南北内法0.67～0.8mで底から15～35cmの高さに40cm程の円窓をあけて取水口とする。井戸の底は石敷面からの深さ3.8mにあり、深さと狭さから井戸浚えは不可能であったとみられる。井戸の層序は4層に大別される。石敷から1.6mまでの灰褐色粘質土（1層）は埋立の最終段階あるいはその後掘られた石敷を破壊する土坑に関り、2.4mまでのバラス層（2層）は人頭大の石が詰まった短期間の埋立土で、その下3mまでの砂層（3層）も人頭大の石が多量に混じる埋立土である。これに対して3.7mまでの4

層には有機物が多量に含まれ、上・下端が枠に開けられた取水口の高さに一致していることから使用時の堆積土とみられる。土器は2層の下半、3層、4層上半に多く、約200個体の土師器・須恵器があるが、土師器甕、須恵器平瓶・壺類の出土量の多さが目立ち、杯類は全体の数%程度と少量で、しかも土師器杯C・杯G・杯Hであり須恵器杯類は全体で数点しかない。

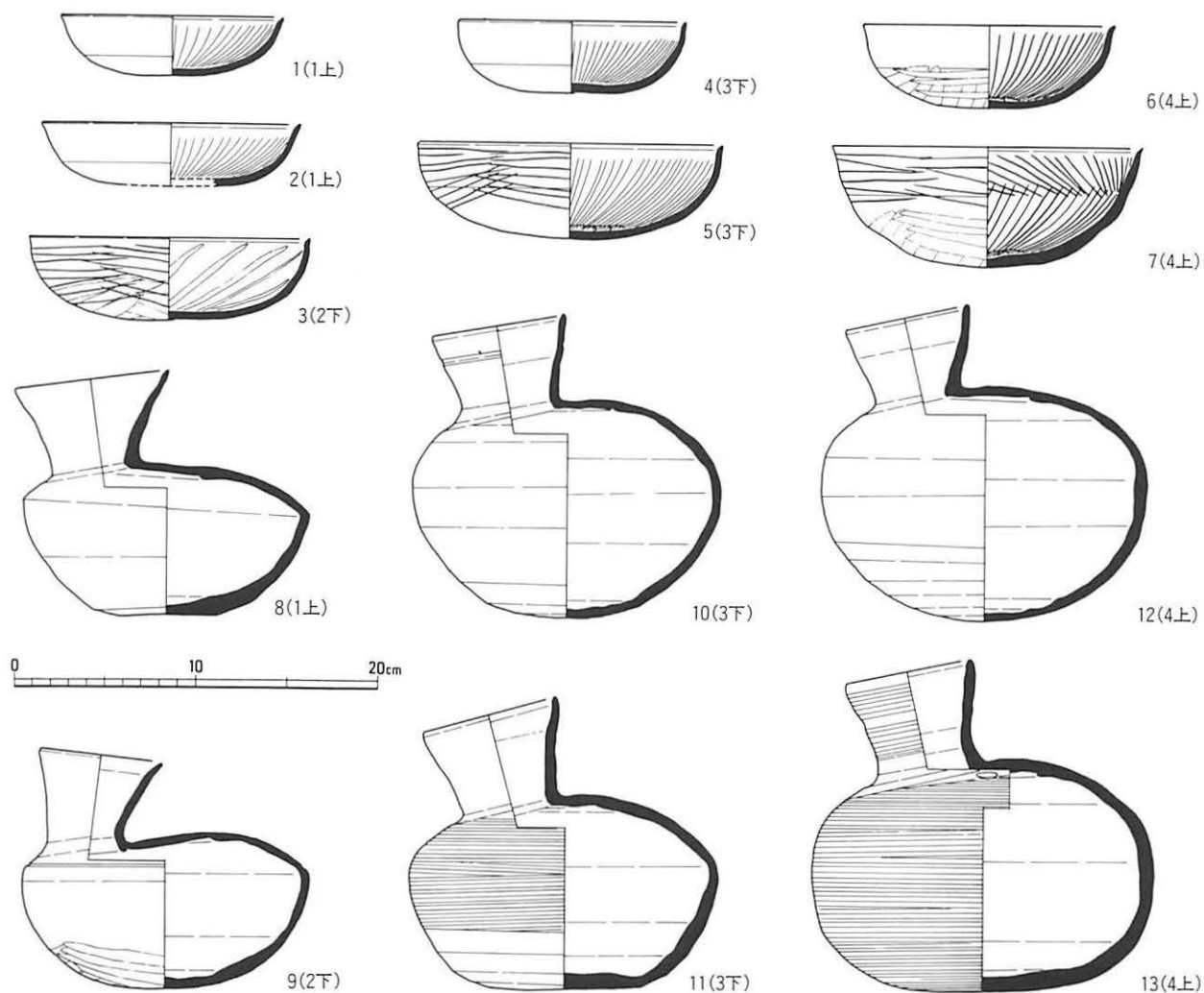
土器の年代観と系統 図は土師器杯Cと須恵器平瓶を層位別に示したもので、上層ほど土師器杯Cの口径に対する器高の割合（径高指数）が小さくなり、平瓶では体部の丸みが取れて肩が張る傾向にあり、上層ほど新しい傾向にあることは明白である。また平瓶には体部にカキ目を施すものとナデ調整のものがあるが、器形変化の方向は産地を異にするとみられる両者に共通しており、この井戸の層序は安定したものとみなすことができる。

そこで各層の土師器杯Cを従来の編年基準に照らすと1層の土師器杯CⅡは径高指数25～27前後で飛鳥Ⅳに位置づけられ、2層は口径15.5cm、高さ4.6cm、径高指数30前後で飛鳥Ⅲ、3層は径高指数31～32で杯CⅠ（5）の底部をヘラケズリしない点でも坂田寺SG100を基準とする飛鳥Ⅱに近い内容である。そして4層は、杯CⅡ（6）が口径13.8cm、高さ4.6cm、径高指数33で、底部を3分割で削るが、飛鳥Ⅱの坂田寺SG100には底部を削る杯CⅡはみられないこと、杯CⅠ（7）が丸底で器高が高く、底部外面を5分割で削り、内面には太い暗文を2段に施すが、二段暗文の杯CⅠは飛鳥Ⅰの新しい段階である山田寺下層資料にも残ることから飛鳥Ⅰに属すると考えられる。すなわち、井戸SE800は飛鳥Ⅰに始まり、飛鳥Ⅲで廃絶し、飛鳥Ⅳに壊されているのである。

ところで、廃絶時を示す2層の3は法量の上では飛鳥Ⅲに属すが通常の杯Cとは胎土色調を異にするうえに、底部を5分割でケズリ、暗文はナデ



井戸SE800土層模式図 1:50



SE800出土土器 1:4 (括弧内は出土層位)

調整に近い方法で施した異質の杯Cであり、飛鳥地域の飛鳥Ⅲの基準資料とするには問題がある。

また、4層の6・7は内面の暗文が太い点が特徴で、類例は飛鳥地域では、豊浦宮推定地・山田寺下層から出土しているが、大阪府藤井寺市周辺の遺跡からは同じ太い暗文を施した高杯など別器種と共に多数出土している。SE800からは杯類の少なさもあって4層に細い暗文の杯Cはないが、3層に口径16.6cm、高さ6.3cm、径高指数38で外面を5分割ケズリの後ヘラミガキし、内面に細い一段放射暗文を密に施した飛鳥Ⅰの杯CⅠがあり、両者は太い暗文の杯Cが丸底なるが故に器高が高く径高指数が幾分大きくなるものの概ね一致する。このことは太い暗文をもつ6・7は飛鳥地域で通有の杯Cではなく製作者(地)を異にする別系統の杯Cであるとみられると共に、この時期の土師器にはそうした系統の違いを越えた規格性があることを示しており、土器の年代観はその中

にみることができる。

飛鳥Ⅰの杯Cに飛鳥地域に通有の一群とは異なる群別があることについては、すでに甘樫丘東麓の焼け土層出土土器の特徴として報告されているが、それらは内面の暗文が太いものの口縁部の形状などで6・7とも違った一群であり、その単位はかなり小さなものと推定できる。今回除外した杯Gについても口縁部の形と胎土の違いによる細分が可能であって、この時期の杯類は個性的で多様である。そもそも製作技法の異なる杯C、杯G、杯H自体が互いにほぼ似通った法量と器形をもった杯類であり、遺跡や遺構の違いによって互いの構成比が異なることも報告されており、土師器の煮沸具にみられる手法の相違による「型」と杯類の系統・群別を関連づけて把握することによって遺跡の性格を推定する手がかりとなりそうである。須恵器貯蔵具等の産地の検討とともに、後稿を期したい。

(西口壽生／飛鳥藤原宮跡発掘調査部)